



監督・脚本＝ラース・フォン・トリアー／出演＝ニコール・キッドマン／ポール・ベタニー（ギャガコミュニケーションズ G シネマグループ配給／2003年デンマーク映画／177分）

『ダンサー・イン・ザ・ダーク』（00年）のラース監督の超異色作！ ドッグヴィルの村は、床にチョークで線を引いたセットだけ。物書きで空想好きなトムその他、語り（ナレーション）がついて、難解な「哲学論議」が次々と……。村に逃げ込んだ美しい娘、グレースをめぐる、示される村人たちの真の人間性。深く考えると頭がおかしくなりそうだが……。あっと驚く結末にあなたは納得……？

🎬 この映画のキーワードと基礎知識

「ドッグヴィル」とは、村人23人の小さな村の名前。この映画は、この村で起こる9章のエピソードとプロローグからなる物語。1章ごとにその章の要旨が表示され、やたら詳しい語り（解説）がついている。最高に変わっているのは、この村全体が、床にチョークで線を引いただけのセットで構成されていること。鐘、オルガン、ベッド、テーブル、イスなど必要最小限の小道具と、裏の山、廃坑などの大道具だけは置いてあるが、壁もドアも天井もなく、すべてがオープンなセット。車は、このセットの中に入ってくる。したがって、人が家の中に入る時などは、ドアをたたいたフリをするだけ（効果音は別につけてあるが……）という奇妙なもの。最初は何となく違和感があるが、少しずつそれに慣れてくる。

🎬 本当の主人公はトム？

どうもこの映画の本当の主人公は、私のお目当てのニコール・キッドマンでは

なく、トム（ポール・ベタニー）のようだ。トムは空想家で、物書きだが、その能力は「ほどほど」の程度。しかし、村の中で常にみんなをリードし、意見を集約しているのはこのトムだ。プロローグでの村人1人1人の紹介がトムと語りの手によって行われた後、第1章では1発の銃声の後、1人の美しい女性グレース（ニコール・キッドマン）がこの村に現れる。ギャングたちに追われているらしい。そこでトムが、このグレースを村にかくまってやろうと計画したことから、この不思議な物語がスタートする。

2章以下の物語は？

細かいことは別として、2章以下の物語は次のとおり。すなわち、「ドッグヴィル」の村人たちは当初グレースをかくまうことをオーケーするが、それはグレースが村で働くことを条件としたもの。村人に気に入られたいグレースは一生懸命働き、しだいに村人に気に入られ、仲良く過ごすことに。しかしグレースの「手配書」が1度ならず2度も掲示されると、少しずつ村人たちは動揺し、労働を倍にしたり、報酬を減らしたり。さらにある男は露骨な性的欲望を示し、ある子供は変な反抗を試みる。狭い村の中、グレースの弁解は通用しない。遂に村から逃亡しようとしたグレースだが、逆に連れ戻され、逃亡防止のため、重い鎖のついた首輪をはめられることに。その後のグレースはまるで奴隷。男たちのレイプの対象とされ、女たちからもボロクソに。しかしグレースは愛し合っているトムが頼り。他の男たちと同じように、自分の肉体を求めるトムに対して、グレースは「2人が自由になった時に結ばれよう」と話すのだが……。

そこでトムはどうしたのか？ その後事態はどのように展開していくのか？

この映画の宣伝文句である「あの『ダンサー・イン・ザ・ダーク』を超える衝撃のラスト！」とは一体何なのか？ それは映画を観てのお楽しみだ。

ラース監督お好みの、何とも難解な映画！

この映画の監督は、『ダンサー・イン・ザ・ダーク』（00年）でカンヌ国際映画祭・パルムドール賞を受賞したラース・フォン・トリアー監督。『ダンサー・イン・ザ・ダーク』もかなり変わった映画だったが、私は基本的にミュージカルが

好きだし、『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）も大好きだから、違和感なし。そのうえ、歌手のビョークがすごく良かったのでこの映画の評価は高いが、この『ドッグヴィル』は何とも難解すぎる。「人間って、信用したらダメなんだナ」と結論づけてしまうと、何となく暗くなりそう。また主人公のトムが、1人で頭の中で考える「屁理屈」や、「語り」の中で展開される難しい「哲学談義」を聞いていると、わからなくはないものの、かなり難解で疲れてくる。パンフレットで字幕翻訳者の松浦美奈氏が、「字幕の裏側で」と題して、この映画での苦労話を書いているが、そりゃそうだろうと思う。質的にも量的にも、普通の映画の2倍の苦労をしたはずだ。

結局、「ドッグヴィル」の村人たちはワルばかり……？ いや、そんなことはないはず！ またグレースも、せっかく善意で村の人々に溶け込もうと思ったのに、それを裏切られたから、結果的に人間は信用できない存在と結論づけたのか？ いや、そんなことはないはず！ とにかく、このようにいろいろと考えていくと、すごくしんどい。まるで、ドストエフスキーの『罪と罰』や『カラマーゾフの兄弟』を身構えながら読んでいる感じ。あるいは学生時代のように、ニーチェがどう、カフカがどう……と議論している感じ。とにかく難解……。

タイムリーな新聞記事だが……

2004年3月13日の朝日新聞夕刊は、『『自己欺瞞』と『自傷』の時代』「唯一の希望『知性』を提示」という見出しで、森岡正博・大阪府立大学教授の映画評論を掲載した。その書き出しは、『『ダンサー・イン・ザ・ダーク』で知られるデンマークの映画監督、ラース・フォン・トリアーの新作『ドッグヴィル』が公開中だ。『アメリカ』と『モラル』を強烈に皮肉り、その毒っ気のあまり観客の賛否は真っ二つに分かれている。大阪府立大学の森岡正博教授に、映画が現代社会に投げかけている問題を、読み解いてもらった」というもの。つまりそのココロは、「読み解いて」もらわなければ、この映画はなかなかわからないということか……？ この森岡正博教授は1958年生まれで、生命学・哲学の専攻。その立場からすごく面白い森岡氏流の読み方を示してくれていることはたしか。

パンフレットによれば、デンマーク生まれのラース監督は、『『ダンサー・イ

ン・ザ・ダーク』公開時、一部のアメリカ人ジャーナリストから行ったこともない国の映画を作ったと非難され頭にきた」と書かれていることからわかるとおり、この『ドッグヴィル』はラース監督の目から見たアメリカを描いた映画であることはまちがいない。しかし、森岡教授のようにここまで1つの「見方」を提示（あるいは決めつけ）されるとどうも……？

ニコール・キッドマンはステキ！

ここからは、坂和流のミーハー的なニコール・キッドマン讃歌だから、読みたくない人は読まなくても結構！ 同時期に観た『コールドマウンテン』（04年）は、ニコールの美しさに見とれながらの2時間35分だったが、この『ドッグヴィル』の2時間57分は、ニコールの演技力にひたすら感心。

もともとニコールは、美人系ハリウッド女優の典型として生きていくことが可能な女優だが、『ある貴婦人の肖像』（96年）や『アイズ・ワイド・シャット』（99年）など、ちょっと変わった系列の映画にも出演している。この『ドッグヴィル』への出演は、ニコールがラース監督との仕事を希望していると聞いたラース監督が、これをオーケーしたことによって実現したもの。そして、2人の会見においては、即座に、ニコールはラース監督を全面的に信用したとのことだ。

なお、ラース監督は、俳優たちがラース監督を信用してくれたかどうかについて、正直に、トムを演じた男の「ポール・ベタニーは、男だから少し手間取ったが」とインタビューで答えている。この手の映画は、監督と俳優との間によほど強い信頼関係がなければ、とてもやっていけないはず。ヘタすると、途中で意見が合わず、降板という事態もありうるはずだ。

2001年にトム・クルーズと離婚した後、『ムーラン・ルージュ』（01年）、『めぐりあう時間たち』（02年）、『コールドマウンテン』（04年）と立て続けにハリウッド大作に登場し、まさに「今が旬」のニコール・キッドマンが、こんな一風変わった映画に出演する勇気も大したもの。

なおスケールは全く違うものの、この同じ日に観た日本映画の話題作（問題作）、『花と蛇』の杉本彩にも同じような女優魂を見て、感激したものだ。

2004(平成16)年3月15日記